

社会福祉事業史⑥ —北海道立大沼学園の展開を中心に—

松田賢一* 中里智彦**

Study on History of the Social Work Projects — Part 6 — Focusing on the Development of HOKKAIDOURITSU OONUMAGAKUEN —

Kenichi MATSUDA, Tomohiko NAKASATO

1. はじめに

渡島管内七飯町において、100年以上の長い歴史をもち、現在まで継続されている児童福祉施設が存在する。児童自立支援施設「北海道立大沼学園(以下、大沼学園)」である。大沼学園の所在地は亀田郡七飯町西大沼8番地であり、順路は、国道5号線を函館から長万部方面に進み、大沼隧道(671m)を抜けると正面に「小沼」が一望でき、道路沿いに約800m進むと左側に位置している施設である。しかし、ここがどのような施設であるかは、道南に住む方々でも理解している人は少ないものと思われる。児童自立支援施設とは、児童福祉法第44条によると「不良行為をなし、又はなすおそれのある児童及び家庭環境その他の環境上の理由により生活指導等を要する児童を入所させ、又は保護者の下から通わせて、個々の児童の状況に応じて必要な指導を行い、その自立を支援し、あわせて退所した者について相談その他の援助を行うことを目的とする」¹⁾と記載されている児童福祉施設である。

児童自立支援施設・大沼学園が一躍脚光を浴びた時があった。2019(平成31)年11月である。それは、北海道出身の作家谷村志穂氏が大沼学園を題材にした小説「セバット・ソング」が発表されたことによる。取材協力した当時の大沼学園長の三浦辰也氏が学園の機関誌「令和元年度第2号湖畔」²⁾に以下のような文を掲載している。

「幼少期からの過酷な生活に耐えながらも児童自立支援施設での生活を余儀なくされたきょうだい(兄と妹)は、施設生活を通じて成長していきます。寄り添う施設職員や彼らを支える人々と織りなすその姿は読者自身の立ち位置により

全く趣を異にします。福祉関係で仕事をされている方、学びの中にある方、施設生活を経験された方、施設で生活をしている子どもたち、さらに、辛苦の中で生きていかなければならぬ子どもたちが、自身のほど近いところで生活していることを多くの方に知って頂きたい。」

私たちの生活の身近にある施設「大沼学園」がどのような施設であるかを理解するために、本稿の課題を次のように考える。大沼学園がどのような経緯で設立され現在まで存続してきたのかを史資料並びに関連文献、関係者からのインタビュー等によって明らかにすることを目的とする。

2. 大沼学園の前身函館訓育院創設の概要

1900(明治33)年に制定された感化法「第1條、北海道及府県ニハ感化院ヲ設置スヘシ」により「感化院」が道府県に設置が義務付けられたが、その当時北海道には施行尚早の議があり遅れること8年後の1908(明治41)年、札幌市郊外藻岩山麓に「北海道廳立感化院」(Fig.3参照)を設置した。これが本道最初の感化院である。

「北海道廳立感化院(北海道廳札幌学院)」設立から4年後に「大沼学園」の前身となる「函館訓育院」が誕生する。その設立経緯について「函館訓育院経過概要(以下、経過概要)」を基に以下に整理した。「函館区在住の英国宣教師であるミス・ダブソンが感化事業の必要を唱えた。その考えに、ドクトル横山軫(函館渡島外科病院院長)、函館商業学校長の神山和雄の両氏がこれに賛同し、必要性を強調した。横山夫人、弁護士三坂夫人等が起こって輿論を喚起し、官民一

* 函館短期大学名誉教授

** 独立行政法人国立病院機構函館病院医療ソーシャルワーカー

体の支持を受けることになる。」³⁾なぜ感化院の必要性を唱えたか具体的内容については、ドクトル横山によると「明治40年10月刑法が改正されて満14歳以下の少年少女に対する科刑が撤去された当時、その反動として至る所に不良少年の跋扈を見、ことに明治43年当時は、函館に於いてその実数3百と称せられた程で、函館市民は頻発する放火事件と窃盗事件に悩まされ、市内の安寧・秩序が根本から破壊せられたる感があった。時の函館警察署長だった山川警視が、殆ど寝食を忘れて日夜非常なる苦心をし、努力した結果、その犯行は殆ど不良少年の所為なることを探知し、系統的捜査網を張った末、彼等不良少年の元凶11名を検挙した。この事実を目撃した市民の多数は、驚異と恐怖の一念に駆られるだけであった。この不良少年を如何に処置すべきにおいては、何等の方策を見出し得なかった。この時、私はある動機に打たれ、不肖をも顧みず是等の少年を適當の場所に収容し訓育感化の道を講じ漸次多数の不良少年を収容徳化せしめようという計画を立て、大方諸氏の諒解を求め官民有志、各宗教団体、内外人多数に亘って函館に於ける有志団体の後援の下に、明治45年5月3日、大沼湖畔即ち今の沼学院所在の地を創して函館訓育院を創設し、最初に先ず元凶3名を収容、三か月を経て更に2名を、五か月後に6名、全部11名を収容し、感化と訓育の事業に着手したのである。」⁴⁾明治期後半の函館市内での不良行為の実態が理解できよう。

また、収容した11名の不良少年達のその後の動向について、同じくドクトル横山によると、「函館訓育院に収容したる放火常習犯の少年が長い訓育院生活を終えて退院し、社会人となったが、其の後今日まで是等の退院者から一人の放火再犯者をも出していないという事実は、如何に少年感化院の重要であるかということを明らかに実証するものである。」⁴⁾と函館訓育院を創設した意義と感化訓育事業の重要性を述べている。

函館訓育院創設に至るまでを同じく「経過概要」³⁾により時系列に以下に記述する。

I. 1912(明治45)年2月3日:創立発起人総会を商業学校で開催し、以下のような報告並びに決定した

「決定事項」

(1) 本院を亀田郡七飯村大字峠下村長井川8番

地に設置する

(2) 名称を函館訓育院とする

(3) 規則草案を認め財団法人とする

(4) 東京家庭学校校長留岡幸助に依頼して主任を推薦してもらうこと

(5) 評議員60名選任する

函館訓育院がどのような建物であったかは、Fig.1⁵⁾を参照。また、Fig.2⁶⁾の前列右の男性が函館訓育院誕生に多大な貢献と寄附を寄せた、函館訓育院・第二代院長横山軫氏である。

II. 1912(明治45)年2月10日:評議員会が商業学校で開催される

「決定事項」

(1) 院長には渡邊熊四郎

(2) 幹事(5名) 三坂玄吉、宮崎松太郎、金澤彦作、望月日謙、伊東松太郎

III. 同年2月24日:幹事会が商業学校で開催される

「決定事項」

(1) 幹事長に三坂玄吉

(2) 留岡幸助の尽力により、東京家庭学校幹事・錦古里忠次を本院主事に決定する

同年4月19日、主事・錦古里忠次着任。直ちに、院舎修築その他諸般の設備に着手7月2日に院内に移り住む、妻女・たか子氏を助手、他農場主任1名、書記1名を任命、同年7月15日、開院1名の院生を収容する。ここに函館訓育院は、正式に船出をしたのである。

1914(大正3)年6月1日初代渡邊熊四郎院長病氣にて辞任。同年6月5日横山軫氏が第二代院長となる。同年9月23日、開院式挙行並びに生徒3名の退院式を行う。

1914(大正3)年12月23日 内務大臣より、財団法人許可される。1918(大正6)年3月30日、北海道道廳代用感化院に指定される。

筆者は「はじめに」に大沼学園のまでの順路について、国道5号線を基準に述べたが、函館訓育院創設時の所在地を記述する。『函館訓育院要覧第3號』「本院の道しるべ」によると以下のように紹介されている。

「函館より汽車が峠下のトンネルを通過して、前面に碧波洋々たる大沼小沼を望むとき、左手の車窓より湖面を隔て、茂林の間に見ゆるものが即ち本院であります。大沼停車場よりは線路傳

ひに里程約一里です。大沼公園よりは渡舟の便があります。」⁷⁾大沼学園前の国道5号線は、『開院50周年誌』⁸⁾によると、1959(昭和34)年に工事が始まり完成したのは、1964(昭和39)年であり、それまでは、現在の大沼駅(当時は軍川駅)近くにあった栈橋より、船で渡る方法が大方であった。即ち「陸の孤島」と言っても過言でない状態であった。

このことを第7代大沼学院長八島悦栄氏(Table. 1)のご子息である、八島勲氏がインタビューで次のように語っている。「私が大沼学院に来たのは、小学校2年生の時でした。昭和21年3月5日の夕方、軍川駅(現大沼駅)に到着する。線路伝いに大沼学院を目指して歩いた。私は、大沼学院の生徒

におんぶしてもらいました。鬱蒼と茂ったところを歩いて行った記憶がありました。学院に着いたら、職員・生徒が一行に並んで私たちを迎えてくれ、皆揃って私たちに一礼をしました。その時私は、『父親は偉い人なんだな』と子供心に思った。小学校に通うのは、大沼学院専用のボートで通ってましたし、冬は、小沼が凍結した頃、沼の上を歩いて通っていました。途中『湧き壺』という所があり、大人が杭を打ってくれていたの、そこに落ちないで通うことができました。」⁹⁾勲氏の話からも、前述に陸の孤島と表現したことが理解できよう。



函館教育院舎

Fig.1 函館教育院舎



(本院理事)

Fig.2 本院理事(前列右が第二代院長横山軫氏)

3. 北海道廳立大沼學院から廳立少年教護院・教護院へ

(1) 北海道廳立大沼學院

不良少年達を更生させるべき有志が立ち上がり創設した函館訓育院であったが、その維持・運営費については、賛助員の出金、即ち寄附で成り立っていたことから、次第に経営が悪化し、1923(大正12)年には、当事者の努力空しく経営困難な状態になり、1924(大正13)年3月31日、設備財産を北海道廳に寄附移管することになった。

この状況について、函館訓育院創設に携わったドクトル横山によると「然れども一面に於い

ては、諸物価の騰貴と共に經常費次第に膨脹せると、また他面に於いて年を経るに従って後援会員の転任或いは死亡するもの漸く多数なるに及んで經常次第に困難に陥り、後13カ年の間、経営に甚だしき苦心を重ねつつあったが、時恰も道廳当局に於いて最も優秀なる廳立感化院設置の計画を樹て、種々研究の結果、函館訓育院を唯一候補として囑望し来ったので、事業の前途と目的精神に鑑み、これを理事会並びに評議員会に諮り、感化事業を同所に於いて永く継続すべきことを条件とし、財団法人函館訓育院の事業と財産の全部を大正13年4月1日を以て北海道

廳に寄附し移管即日北海道廳大沼學院の創設となり、茲に現在吾が國に於ける感化院の現出を見るに至ったのである。」⁴⁾ここに函館訓育院としての使命は終わりをづけ、生徒24名収容のまま、北海道廳に引き継がれる事になり、1924(大正13)年4月1日、名称「北海道廳立大沼學院」となり、函館訓育院第二代院長横山軫氏は退任する。同年4月1日、北海道廳立札幌学院、武石千春教諭が北海道廳立大沼學院長心得として赴任する。(Table.1)

北海道で最初に感化院として創設された「北海道廳立札幌學院」は「位置の不適と院舎腐朽により」同年3月31日付で廃止となり、16年の歴史に幕を閉じることになった。北海道廳立札幌学院の全児童39名の学籍を大沼學院に移籍すること、収容定員80名、経費予算22,721圓となる。札幌学院長の福原空三郎氏が大沼學院長に命じられたことから、武石氏が退任。教諭4名、保姆心得2名を置くこととなった。1924(大正13)年7月22日 移転事務処理の為、札幌仮事務所に滞在中の福原院長は大体の取りまとめを終了し、生徒の内25名を引率し大沼に移転し、院長として着任した。同年10月8日、学院新築設備完成したことから、札幌仮事務所の引き渡しと残留生徒14名が大沼に到着し、移転が全て終了した。

(2) 北海道廳立少年教護院

1933(昭和8)年は、「少年教護法」が公布された年である。1934(昭和9)年10月10日に大沼學院は「北海道廳立少年教護院」となる。

筆者は、Table.1に「函館訓育院・北海道(廳)立大沼学院(園)歴代院(園)長一覧」を関係資料等により取りまとめたが、院長について異例の人事がなされていることに気づいた。第10代院長に就任した山石義明(よしはる)氏である。偶然にある会で、山石氏の次女小林律子氏(82歳)を知ることとなり、インタビューを快く引き受けて頂いた。学園(学院)に野球を通して人間教育をしていく、第7代八島悦栄氏のご子息勲氏と山石氏の次女小林律子氏は同級生であったことを知った。以下インタビュー¹⁰⁾の内容を記す。学院の長い歴史の中でも貴重な資料となり得る内容であった。小林氏によると、山石氏の経歴等は以下の通りである。「山石義明氏は、道立大沼学院には、昭和12年7月より昭和36年7月まで庶務課長並びに同院長として勤務。」Table.1から

すると山石氏は、4代の福原院長から高杉院長、湯浅院長事務取扱、八島院長、松永院長、菅原院長と6人の院長等に使い、菅原院長の人事異動に伴い、1960(昭和35)年4月4日付で、事務代理に就任、同年9月27日に院長の発令がなされたことが理解できよう。退職までの25年間大沼学院を事務方として支えてきた方であり、大沼学園(学院)の生き字引的な存在であると筆者は感じた。Table.1の備考にある通り、山石氏は、優良会計職員として、北海道並びに東北・北海道出納長より表彰された実績があり事務官として有能であったことが理解できよう。

小林氏はインタビュー¹⁰⁾で大沼学院生徒の心温まるエピソードについて、新聞記事を基に話された。その新聞記事の見出しは、「病める先生に愛の輸血・一里餘の雪道いとわず きょうはほくが 更生の道歩む 大沼學院の生徒」であった。1951(昭和26)年3月20日(火)函館新聞の記事である。(2015,大沼学園提供)その記事の内容を以下に一部紹介する。

「同學院で一番古い山石義明教官(49)だが、二十四年春、胸を痛み間もなく、七飯療養所に入所の身となった。満二年近い入院で快方に向かい、最近同所で手術を受けることを申し渡されたが、そのためには手術前に千グラム以上手術後に相当数の輸血がどうしても必要だった。このことを學院の先生たちから薄々知った97名の全生徒は、『山石先生はほくたちの大事な先生だ。ほくたちの血を提供しよう』と代表が八島院長に申し出、これを聞いた山石先生は生徒たちの純情な行為に感激。(中略)この輸血に毎日一人ずつ交代で學院から軍川駅までの一里余りの雪道を歩き、汽車で七飯療養所に通う。山石先生は、『きっと一日も早くなおってまた仲良く勉強しましょう』と輸血を受けたばかりの手を布団の中から取り出して少年達の頭をなで眼を潤ませていた。」¹¹⁾どれだけ大沼學院の生徒たちに山石氏が慕われていたかを証明する出来ごとであろう。

偶然に小林氏と知り合い、院長就任について謎に近かった第10代院長、山石義明氏の人間性を含め仕事に対する誠実さ・公正さ等を知り、大沼學院から大沼学園に続く系譜は山石氏の尽力なくして成り立たないものと実感した。

(3) 教護院

大沼学院は、1948(昭和23)年1月に同法に基づ

き「教護院」に名称変更となる。戦前までの少年教護院は、児童福祉法第44条に規定される「教護院」となり、目的については「不良行為をなし、又はなす虞のある児童を入院させてこれを教護すること」となった。

戦後教護院になった大沼学園(学院)の歴史として特筆すべき継承行事が令和の今日まで続いている。それは、「大沼地区少年野球大会」の開催である。第7代院長として赴任した八島悦栄氏が発案し取り組んだものである。その事については、ご子息である勲氏がインタビューで次のように語った。「父は、札幌師範学校を卒業し小学校の訓導をしていたが、一時家計のことを考えて中国青島で小学校の先生をしていたが、ホームシックと重なり、帰国した。その後は、千歳市の航空省の女子工員官舎の舎監となった。そんな時、時の教育長から『田舎だが大沼学院の院長の席が空いているから大沼に行かないか』と言われ、戦後の昭和21年に大沼にきました。父は、野球が三度の飯より好きで、野球を通して人間教育をしていこうとした。特に、学院以外の人たちと交流することに意義があり、将来社会に出ていく生徒のことを思うと、とても良い教育方法であると考えた。父は、グラウンドを作るために夕方よく函館に出かけて行き、企業回りし寄附金を集めていた。その苦勞が実り、ついにグラウンド整備を教職員と生徒で行い、水はけのよいグラウンドを作ることができた。昭和23年7月11日に記念すべき第1回大沼地区少年野球大会を開催した。」⁹⁾であった。その野球大会の成績については、『創立100周年誌』¹²⁾によると、大沼地区少年野球大会において、大沼学園(学院)は、63回までの大会にて、7回の優勝を誇り、東北北海道地区少年野球大会において、優勝2回、準優勝8回、3位1回、全日本少年野球大会準優勝1回である。なお、大沼地区少年野球大会に於いて、大沼学園は第43回大会から第62回大会まで優勝はなく、第63回大会は、大会史上雨天中止となったと記録されている。

4. 北海道立大沼学院と北海道立日吉学院統合・北海道立大沼学園

1981(昭和56)年3月31日、北海道立大沼学院と北海道立日吉学院が統合の為、両院は閉院し1981(昭和56)年4月1日新たに「北海道立大沼学

園」となる。

日吉学院の閉院と大沼学院との統合について、『七飯町史続刊』によると、次のように記述されている。「両施設ともに定員満杯の状態が昭和四十年代前半まで続いたが、後半から入所者の減少傾向が始まり、昭和五十三年(1978)度の初の在籍数は、大沼学院13人(充足率17.3%)、日吉学院11人(充足率24.4%)と激減し、道南に男子教護院を二施設も設置するという理由がなく、統合することになった。統合施設は、社会資源の活用がより可能な函館市近郊に求めて、適当な候補地二か所に絞り込んで検討を重ねた。しかし、適地の結論を得ることなく、結局は、大沼学院の施設設備(本館・体育館)による統合となったのである。」¹³⁾また、当時道立日吉学院「あけぼの寮長」であった家村氏は、インタビューで以下のように語った。「大沼の地になったというのは、自然環境というのがとても大きなウエイトを占める。文明の利器を期待する向きもありますが、子どもたちを育てる環境としては、この大沼というのは、他にはない優れた要素も持っているんだというのが強い主張だった」¹⁴⁾と述べた。このことが公的に表明されたのが、1980(昭和55)年である。

1981(昭和56)年4月、旧日吉学院児童5名、旧大沼学院児童26名の合計31名で「北海道立大沼学園」に名称を変更し、新たな教護施設として出発した。4月17日には、統合後初代学園長高田護氏が着任した。大沼学園を知らしめる活動の一つに「版画カレンダー作り」がある。「版画カレンダー作り」は、当時晩翠寮の寮長であった家村昭矩氏が1983(昭和58)年に取り組んだのが発端である。現在では大沼学園を知らしめる野球と同様の活動となっている。版画カレンダー作りについて「函館新聞」は、以下のように報道している。「園生手作りの版画カレンダーが今年も出来上がった。木版画の素朴な風合いのデザインは評判も良く、毎年問い合わせが多く寄せられている。カレンダーはおおよそ20年前学園や寮の様子を知ってもらおうと家村氏の寮で誕生。1993年からは学園全体で取り組む、恒例作業となっている。家村氏は、下絵描きから彫る、印刷作業を通じて、忍耐力を養っている。カレンダーから子供たちの生活ぶりを感じてもらいたい。」¹⁵⁾とある。

5. 児童自立支援施設 北海道立大沼学園

道立日吉学院との統合から17年後の1998(平成10)年4月1日改正児童福祉法施行により大沼学園は児童自立支援施設へと名称が変更となり、施設目的・対象児童・指導方法等も変更になった。このように法律の変化・社会の要請の変化の中で児童自立支援施設は、これまでの支援の方針を見直さざるをえない状況になった。以下見直しのポイントとなっている部分を2点「夫婦小舎制」・「学校教育」について、『100周年記念誌』(2012)、現大沼学園長の米田浩二氏のインタビュー(2020,8,28)、大沼学園分校開校を手掛けた現北斗市立久根根小学校長の西村和彦氏のインタビュー(2020,9,4)等を基に以下に取りまとめた。

(1) 夫婦小舎制

夫婦小舎制について、筆者は現大沼学園の米田浩二園長にインタビュー¹⁶⁾を実施した。インタビュー内容は以下の通りである。

質問1:「現在の寮の状態についてお尋ねします」

米田氏:「7月1日現在の状況ですが、今、3寮稼働してまして、夫婦小舎制が1組、交代制寮が2つあります。昨年から交代制寮が本格的にスタートして、若い職員が交替寮が多いので、日々悪戦苦闘していますが、やる気・体力はかなり旺盛にあるので、その経験不足の部分は、うちの課長がもと寮長ですので、経験も豊かなので、日々アドバイスしながら、夫婦寮の寮長も長く経験しているのです、そうした人たちのスーパーバイズ所謂、指導・助言で行っている。」

質問2:「交替制はどのような仕組みになっていますか」

米田氏:「基本的には通いで8名ですね。いわゆる寮母というか、お母さんとしての役割を果たす女性職員が1名とあと7名の泊り勤務を行う男性職員ですね。8名で1寮を行っています。」

質問3:「そのことは、前から行ってきた夫婦小舎制との弊害はありますか。」

米田氏:「私が来た段階(2020,4月)でもう方向性が出ていた。人が担っていけるような人材というのが全国的にも厳しいということが一つある。どうしてもずっと子どもの面倒をみていくと、気持ちがだ分近づきすぎてしまって子どもの問題行動みたいところが、なかなか冷静になることが当然難しくなる。夫婦の方を否定してい

る訳ではありませんが、ある程度一定の距離感を保って、次の日も別な職員に交替し、昨日あったことを引き継ぐこともできるのかな。ただ逆にマイナス面は、同じ人がずっと生活しながら、親ではないが親代わりとして、きちんと育てていくことの夫婦制の良さは当然ある。プラスマイナス両面というものがある。ただ、実際人材がやはり希望される方が居ないという現状があることが一番大きいかなと思います。」

家村氏:「これまでの大沼学園は夫婦小舎制をとってきたが、交替制に切り替えたことは賛成しかねる。昔は、ここに来たかったという気持ちと今は採用試験を受けて配属される形なので、そのギャップはある。」

米田氏:「実は寮を持つ、持たないは別にしても、今でもそう思っていますが、児童自立というのは、ある程度伝承されていかなければならないのかなと思います。児童養護でも、一緒に生活しながら、積極的にやりたくないような日課(掃除や洗濯)をしたり、自分たちで生活しながら、やりたくないこともやるというような、そういう気持ちみたいなものを育てていくことが基本的に社会性をつくっていくことに繋がる。それは児童自立特有なものだし、悪いことをしたらきちんと謝って次の日を迎えるということも、それらは古いとか新しいとかではなくて、児童自立としての必要な指導だと思うんです。根幹といいます、子どもたちと遊んだりした人間がやっぱり次の新しい職に伝えていくことが必要と思います。」米田氏のインタビューでは、学園就任時は、夫婦小舎制から交替制に移行している段階であったが、元大沼学園の園長であった家村氏は、伝統的な夫婦小舎制の良さを知り尽くしている立場と、寮長を経験したことから、存続に向けて努力の必要性を説かれていた。また、現園長の米田氏は、児童自立としての根幹の部分を見失わず、その指導をしっかり継承することの大切さを語っていた。

(2) 学校教育導入

改正児童福祉法第48条において「児童自立支援施設の長は、学校教育法に規定する保護者に準じて、その施設に入所中又は受託中の児童を就学させなければならない。」¹⁷⁾とある。この法令は、これまで院内処遇が基本形であった児童自立支援施設の中に、分校ないしは分教室の形態で小

中学校の教員を入れて、学校教育を行うことを意味している。

大沼学園に分校を開校するに当たり、道教委から任命されたのが、当時渡島教育局指導主事で現北斗市立久根別小学校校長西村和彦氏であった。西村氏にその当手を振り返ってもらいインタビュー¹⁷⁾を実施した。インタビュー内容は以下の通りである。

質問1:「準備する上で道教委から、公教育導入のポイントとかの指示はありましたか」

西村氏:「北海道に相応しい公教育を作る準備をするというのが、僕のミッションでした。1年間かけて、何とか大沼学園に学校教育を導入する。については、大沼学園施設と七飯町が管轄なので、七飯町の教育委員会・教育局と連携して、束ね役みたいな。加えて、道教委の指導主事が北広島と遠軽との指導主事も連携を取りながら、同じような形で進めていくことになった。」

質問2:「現大沼学園長の米田先生にインタビューした時に、学校の先生方と施設の先生方の状況を尋ねましたら、朝礼等で様々なことを共有しているので仲良しですと回答もらいましたが、西村先生の頃は、どうでしたか。」

西村氏:「一日居るわけですから、色々な職員と話をしました。大沼学園の施設の指導にはプライドもありますし、誰にも負けないという気持ちがあったと思います。僕は部外者で『何しに来たんだ』という状態でした。最初の半年は沢山言われました。『学校教育はダメだ』と言うようにね。しかし、そのことをしっかり受け止めて、でもね学校としてやらなければならないことを『彼らはずっとしてはいいんだよね』。帰るといことは、帰りやすい状態を作ってやらなければならない。学校も施設も。そこは共通認識でした。本当にこまい話を一対一とか集団とか、私が仕事を終わってから話をしましたね。施設でやっている仕事は、本当に素晴らしい実践で真似できないです。」

質問3:「大沼学園の先生方から『何しに来たんだ』と言われたという話でしたが、駐在中先生方の気持ちはどのように変わっていききましたか。」

西村氏:「現実的に道教委から教育の者が来るという段階で、皆認識していたと思う。大沼学園としては、こうやりたいという話は沢山ありました。こちらは公教育なので、法に従ってや

らなければならないし、学習指導要領があるので、それに従っておこなう。勿論、子どもの実態を踏まえた教育課程を作っておこなう。普通の学校のような指導形態というか、教育課程をつくっておこないます。但し、2年間勉強していないという子どもがいるとすれば、中2から入って来たとしても、小5からの勉強をやらう。それはその子が分からないのに、分からない勉強をしても仕方ないから。正にこういう指導は学校がやる。高校受験とかもあるから、それに向けて頑張るような指導をしていくので、指導の仕方も学校の先生と施設の先生が協力できるような体制を準備していくようにした。」

このような1年間の準備期間を経て課題を整理し、2019(平成21)年4月、鈴蘭谷分校が開校する。西村氏は、開校と同時に教頭として発令される。1年間の大沼学園での経験を生かした「経営案」を校長に提示し、承認され分校としての公務が船出した。

6. 北海道立大沼学園創立100周年

これまで函館訓育院誕生から幾多の法改正の変遷を経て北海道立大沼学園までの系譜を述べてきた。2012(平成24)年、大沼学園は、函館訓育院誕生(1912年)から100周年を迎えた。これら一連の流れをまとめたものがFig.3「各法律の変遷と函館訓育院から大沼学園までの沿革の流れ並びに他施設との関連」である。Fig.3では、函館訓育院から大沼学園までの系譜を太線で示している。児童自立支援施設は北海道においては、大沼学園を入れて3施設存在することから、それらの施設(北海道家庭学校・道立向陽学園)の存在と設立年を掲載し、さらに道南には100年以上の歴史を持つ児童福祉施設が2施設(さゆり園、くすみ学園)あることから、設立年を示し大沼学園との位置関係を把握できるようにした。また、大沼学園と併合(統合)する施設(北海道廳立札幌学院、北海道立日吉学院)がいつ設立され併合したかを明らかにした。図下には、大沼学園の100年の流れがさらに理解できるよう主な沿革を掲載した。1910(明治43)年当時の函館の現状を鑑み、予てから感化事業の必要性を唱えていた英国宣教師ミス・ダブソンの考えに賛同した、医師の横山軫・函館商業高校の神山校長等有志一同が会合を開き、不良少年たちの感化訓育に

ついて本格的に協議をした。その結果、1912(明治45)年2月3日、後に大沼学園に続く「函館訓育院」を大沼の地に設立したのである。しかし、設立から12年後、経営不振となり北海道廳に移管することとなり、1924(大正13)年に「北海道廳立大沼学院」として新たな出発をする。大沼学院は、その後法改正により、「北海道廳立少年教護院」(1934年)、戦後の児童福祉法施行により「教護院」(1948年)に名称変更し存続した。戦前戦後の混乱期は、大沼学院にも大きな影響を及ぼした。敗戦の余波は学院に対して甚だ厳しく、浮浪児が入院しては逃亡し、入院時の半数が事故退院するという苦悶の時代であった。そういう中において、戦後大沼学院長として赴任した八島院長は、子どもたちに生きがいと希望を持たせようと思い、野球を通して人間教育する事を考え、「大沼地区少年野球大会」を開催するに至った。

昭和40年代後半から大沼学院と日吉学院の入所者減少傾向が始まり、道南に男子の教護院2施設の設置理由がなくなり、大沼学院と日吉学院の統合されることになった。1981(昭和56)年名称を「北海道立大沼学園」とし、1998(平成10)年法改正により児童自立支援施設となり、2012(平成24)年函館訓育院誕生(1912年)から北海道立大沼学園は100周年を迎えた。

7. まとめ・考察

筆者は大沼学園の米田園長にインタビューした際に園長から「当園の現況」¹⁸⁾ についての話があった。それによると入所児童で何らかの発達障がいを抱えている児童は95%。また、被虐待経験を有している児童は65%である旨の報告を受けた。このことから、社会的養護の必要は勿論のこと、新しいニーズに対応した施設運営が求められているのではないかと感じた。社会的養護を考える上で具体的で示唆に富む論文がある。日吉学院・大沼学園で沢山の子ども達と向き合ってきた体験から、その子たちの問題行動の背景にあるものを研究・追求した論文である。著者は、第26代大沼学園園長(Table.1)、北海道中央児童相談所所長、北海道家庭学校理事長(現北海道家庭学校特別顧問)等を歴任した家村昭矩氏である。論文名は「男の子の困難と向き合う現場から」『教育』¹⁹⁾ である。一部抜粋して以下に記述する。「施設の児童処遇は指導ではなく『育ち』の支援

である。そして『育てること』は、ほとんど『待つこと』に等しい。よく食べ、よく眠り、よく動き(働き)、楽しく過ごす。時にはムキになってテストやスポーツに挑み、先生方や仲間相手にぶつかり合いをする。幼少期に十分に育ちの環境を得なかった彼らと、生きいきと暮らしたという実感を共にもてるのが大事なことだと思う。それは彼らにとっての『育ち直し』であり、ほんの一時、親に替わってかかわった私たち大人の『育て直し』の過程である。」さらに「子ども達に、生活リズムを安定させ、子どもらしい集中力を発揮できる体験を通じ、人間としての感性をどう獲得させるのか、寮長・寮母夫婦の悩みである。」と記述されている。

寮長・寮母は、悩みながらも子ども達の可能性を信じ支援してきた。これまで学園(学院)を退院した生徒達は、寮長・寮母の温かい支援に対し、学園(学院)での生活は辛くもありがた、充実した日々であり、一人の人間として丁寧に接してくれた教職員に感謝の念を抱いている。寮長・寮母に愛され過ごしたことが、退院生の心の基盤となり、社会において活躍できる原動力となっているものと思う。

学園の生徒たちは、園での生活は自分を変えようと努力する「育ち直し」の期間であること。そして、寮長・寮母は自分を親に代って「育て直し」という基本的な考えに立って、温かく見守ってくれていることを理解していることであろう。

令和4(2022)年に北海道立大沼学園は、函館訓育院創設から110年を迎える。子ども達の自立を推進するため、きめ細やかなで子どものニーズに応じた支援と施設全体がこれまで同様、子ども達への愛情と理解溢れる施設として、110年のその先まで風光明媚な大沼の地に存在して欲しいと願っている。

謝辞

函館短期大学保育学科時代の同僚であった家村昭矩氏と構想2年の歳月を得て完成した論文である。家村氏には、資料提供から各位のインタビューに同席を賜り心よりお礼申しあげる。また、長時間のインタビューで貴重なお話と大切な資料をお貸し頂いた、北海道立大沼学園長米田浩二氏、北斗市立久根別小学校校長西村和彦氏、八島勲氏、小林律子氏に衷心より深謝申し上げます。

Table 1 函館訓育院・北海道(廳)立大沼学院(園)歴代院(園)長一覧

歴代	氏名	在職期間	備考
初代	渡邊 熊四郎	明治 45.2.10~大正 3.6.4 (1912.2.10-1914.6.4)	函館訓育院 ・大正3年財団法人認可
2代	横山 軫	大正 3.6.5~大正 13.3.31 (1914.6.5-1924.3.31)	・大正3年9月23日開院式 及び第1回院生退院式挙行 ・大正6年北海道廳感化院指定
3代	武石 千春	大正 13.4.1~大正 14.3.31 (1924.4.1-1925.3.31)	北海道廳立大沼学院と改称(13.4.1) 院長心得
4代	福原 李三郎	大正 14.4.1~昭和 13.7.4 (1925.4.1-1938.7.4)	・昭和9年北海道廳立少年教護院 ・大正14年北海道廳立札幌学院と併合
5代	高杉 正次	昭和 13.7.5~昭和 19.10.31 (1938.7.5-1944.10.31)	
6代	湯浅 誠一	昭和 19.10.31~昭和 21.3.4 (1944.10.31-1946.3.4)	・院長高杉正次氏転出の為、教諭湯浅誠一氏院長事務取扱となる。
7代	八島 悦栄	昭和 21.3.5~昭和 27.7.31 (1946.3.5-1952.7.31)	・八島院長は、大沼地区少年野球大会を立案 ・昭和23年教護院に
8代	松永 一夫	昭和 27.8.1~昭和 31.11.4 (1952.8.1-1956.11.4) (第2代日吉学院院长:31, 11, 5-43, 4, 23)	・昭和30年道立移管30周年 ・院長公宅落成
9代	菅原 信	昭和 31.11.5~昭和 35.4.3 (1956.11.5-1960.4.3) (初代日吉学院院长:27, 10, 1-31, 11, 5)	・沿革誌改訂に着手(S35.1月)
10代	山石 義明	昭和 35.4.4~昭和 36.7.10 (1960.4.4-1961.7.10) ・院長発令(35.9.27) ・院長山石義明氏退職、後任院長佐藤兼橋氏発令(36.7.10) ・昭和12年7月より学院勤務(通算25年勤務)	・庶務課長山石義明氏、職員会計職員として、北海道会計事務研究会長より表彰 ・庶務課長山石義明氏院長欠員中 事務代理(35.4.4) ・庶務課長山石義明氏 東北・北海道出納長より会計優良職員として表彰(35.8.26)
11代	佐藤 兼橋	昭和 36.7.10~昭和 39.4.19 (1960.7.10-1964.4.19)	・昭和36年北海道立大沼学院に ・開院50周年
12代	須藤 博	昭和 39.4.20~昭和 44.4.9 (1964.4.20-1969.4.9) (第5代日吉学院院长:43.9.2-43.10.1;大沼学院院长と兼務)	
13代	伊藤 康志	昭和 44.4.10~昭和 46.9.30 (1969.4.10-1971.9.30)	
14代	村上 邦男	昭和 46.10.1~昭和 50.6.11 (1971.10.1-1975.6.11) (第8代日吉学院院长:50, 6, 12-50, 10, 31)	・沿革誌改訂に着手(S46.10月)
15代	古川 和多留	昭和 50.6.12~昭和 51.6.30 (1975.6.12-1976.6.30)	
16代	加藤 光雄	昭和 51.7.1~昭和 53.8.2 (1976.7.1-1978.8.2)	
17代	伊東 忠太	昭和 53.8.3~昭和 56.4.16 (1978.8.3-1981.4.16)	・昭和56年4月日吉学院と合併し、北海道立大沼学園に
18代	高田 護	昭和 56.4.17~昭和 60.4.10 (1981.4.17-1985.4.10)	・昭和57年 版画カレンダー作り始まる(家村氏の寮で) ・昭和58年開園70周年
19代	本間 健一	昭和 60.4.11~昭和 61.9.30 (1985.4.11-1986.9.30)	・版画カレンダー作り全寮で始まる
20代	板谷 國康	昭和 61.10.1~平成 2.4.6 (1986.10.1-1990.4.6)	
21代	山本 孝仁	平成 2.4.7~平成 4.3.31 (1990.4.7-1992.3.31)	

22代	中正 憲 佑	平成 4.4.1~平成 6.3.31 (1992.4.1-1994.3.31)	・平成6年 日吉学院との統合10年
23代	山岸 孝 雄	平成 6.4.1~平成 8.3.31 (1994.4.1-1996.3.31)	
24代	佐藤 隆 三	平成 8.4.1~平成 11.3.31 (1996.4.1-1999.3.31)	
25代	和田 嘉 允	平成 11.4.1~平成 13.3.31 (1999.4.1-2001.3.31)	
26代	家村 昭 矩	平成 13.4.1~平成 16.3.31 (2001.4.1-2004.3.31)	・平成15年大沼学園ホームページ開設
27代	宮地 勉 彦	平成 16.4.1~平成 18.3.31 (2004.4.1-2006.3.31)	
28代	望月 克 美	平成 18.4.1~平成 21.3.31 (2006.4.1-2009.3.31)	
29代	長野 正 稔	平成 21.4.1~平成 23.4.30 (2009.4.1-2011.3.31)	・七飯町立大沼小・中学校鈴蘭谷分校開校
30代	梶原 敦	平成 23.5.1~平成 25.3.31 (2011.5.1-2013.3.31)	・平成24年創立100周年
31代	水上 和 俊	平成 25.4.1~平成 28.3.31 (2013.4.1-2016.3.31)	
32代	三浦 辰 也	平成 28.4.1~令和 2.3.31 (2016.4.1-2020.3.31)	・平成31年大沼学園を題材にした小説「セバット・ソング」(谷村志穂著)発売
33代	米田 浩 二	令和 2.4.1~ (2020.4.1~)	2020.4 月 七飯町立大沼高陽学院鈴蘭谷分校開校

※児童自立支援施設北海道立大沼学園「湖畔」創立100周年記念誌、「沿革誌」(昭和35年1月着手 菅原信院長)を参考に筆者が作成

※歴代については、院長心得・院長事務取扱は100周年誌には、記載されていないが、在職期間に矛盾が生じるため、正式に記載した。また、函館訓育院が現在の北海道立大沼学園に継承されていることから、函館訓育院時代からの歴代とした。

引用・参考文献

- 1) 大豆生田啓友・三谷大紀編 (2019). 最新保育資料集, ミネルヴァ書房, 86, 88
- 2) 三浦辰也 (2019). 小説セバット・ソングに寄せて. 令和元年度第2号湖畔
- 3) 函館訓育院経過概要 (1913). 函館訓育院, 1-30
- 4) ドクトル横山軫 (1930). 函館訓育院の創設を顧みて. 北海道社会事業第67号, 4-5
- 5) 函館訓育院要覧第3號 (1916). 財団法人函館訓育院
- 6) 函館訓育院要覧第4號 (1917). 財団法人函館訓育院
- 7) 函館訓育院要覧第3號 (1916). 財団法人函館訓育院, 1
- 8) 湖畔特別号開院50周年記念 (1961). 北海道立大沼学院, 6, 14-19
- 9) 八島勲氏インタビュー (第7代八島悦栄院長ご子息). 2020.6.9(火). 午前10時-午前11時40分. 学校法人野又学園本部会議室
- 10) 小林律子氏インタビュー (第10代院長山石義明氏二女). 2020.9.26(土). 午前10時30分-午前11時30分. 学校法人野又学園本部会議室
- 11) 函館新聞 (1951.3.20). 病める先生に愛の輸血 (大沼学園提供)
- 12) 湖畔創立100周年記念誌 (2012). 北海道立大沼学園, 56-57, 67
- 13) 七飯町史続刊 (2007). 北海道七飯町, 746-747
- 14) 家村昭矩氏 (第26代大沼学園長) インタビュー. 2020.7.11(土). 午後1時30分-午後2時30分. 家村氏自宅
- 15) 函館新聞 (2001.12.27). 版画カレンダー完成
- 16) 米田浩二氏 (現北海道立大沼学園長) インタビュー. 2020.8.28(金). 午後1時-午後3時30分. 北海道立大沼学園視聴覚室
- 17) 西村和彦氏 (現北斗市立久根別小学校校長) インタビュー. 2020.9.4(金). 午後2時-午後3時30分. 北斗市立久根別小学校校長室
- 18) 米田浩二氏 (現北海道立大沼学園長). 当園の現状 (入所児童等の状況)
- 19) 家村昭矩 (2001). 男の子の困難と向き合う現場から. 「教育」国土社. 教育科学研究会編集, 31-44